

平成 26 年度 聴覚活用委員会の取り組み

青山 浅日 木村 淳子 寺井 寛 久川浩太郎
石崎美津希 石井 清一 橋本 時浩

聴覚活用委員会では平成 26 年度、幼児児童生徒、校内教職員に対して聴覚活用の重要性の再認識を促すべく昨年度の取り組みを踏まえて、新たな取り組みをいくつか行ったので報告する。また、昨年度に引き続き、各部の良聴耳平均聴力及び人工内耳装用状況についても併せて報告する。

【キーワード】聴力測定 校内研修 補聴ポスター 補聴だより 補聴機器点検 良聴耳平均聴力

1 はじめに

新生児聴覚スクリーニング検査の普及による難聴の早期発見・早期教育開始や、デジタル補聴器・人工内耳等の補聴技術の進歩に伴い、従来よりもはるかに聴覚活用に根ざした教育を展開することが可能になってきている。そのためには、幼児児童生徒の補聴環境を整え、教職員の共通理解をはかるとともに、保護者や幼児児童生徒の意識向上をはかるための取り組みが欠かせない。

本校では、聴覚活用委員会が設置されており、委員会メンバーは、各学部より 1 名、教務より 2 名の計 7 名で構成されている。昨年度まで、「補聴だよりの発行」、「メーカーによる補聴器・人工内耳等に関する研修」及び「補聴器の点検」等を行ってきた。今年度は、昨年度までの取り組みを踏まえた上で、「聴力測定に関する校内教職員向け研修会の実施」、「補聴に関するポスターの発行」、「教職員向け補聴だよりの発行」、「児童生徒と対面した補聴器・人工内耳（以下補聴機器と表記）点検」等新たな取り組みも行ってきた。その概要について報告する。

2 教職員研修

(1) 聴力測定に関する校内教職員向け研修会

本校では、定期聴力測定として、幼稚部では年 3 回、小学部以上は年 1 回を目安に聴力測定（裸耳聴力測定・装用閾値測定）を実施している。定期測定以外にも必要に応じて聴力測定を実施しており、学

級担任が中心となって行っている。今年度、教職員の力量向上を目的として、夏期休業中に教職員研修を実施した。

① 実施時期・回数・参加者

夏期休業中に、5 回実施した。1 回の研修時間は 30～40 分を設定した。自由参加とし、1 回の参加人数は 5 名前後となるようにした。全体で 25 名（養護教諭・寄宿舎指導員含む）の参加があった。

② 研修テキストの作成

聴力測定の研修にあたって、テキスト（全 28 ページ）を作成した。内容は、標準純音聴力測定・音場聴力測定の基本的な手順に加え、実際の測定の場合での留意点、反応が安定しない場合の対処など、実践的な内容を多く盛り込むようにした。テキストは研修であげられた質問などを盛り込み、随時改訂していった。

③ 研修の形態

講義・実習形式で行い、オーディオメーターを実際に操作する時間を設けた。講師は、委員会メンバーが持ち回りで担当した。委員同士が学び合う機会にもなった。

④ アンケートより

研修後、アンケートを実施した。結果は、以下の通りである。

a 開催時期・時間について

- ・夏期休業中で良かった（9 名）。
- ・聴力測定を行う前の時期に行った方が良いが、時間がとりにくい。夏期休業中だと余裕をもって取り

組める。

b 研修の形態について

- ・少人数で良かった（2名）。
- ・質問がしやすかった。
- ・もう少し質問の時間があると良かった。
- ・実習の時間がより多くとれると良かった。

c 研修内容について（意見抜粋）

- ・聴力測定の研修は定期的に行えると良い（2名）。
- ・資料をもらえたので、読み返して勉強したい。
- ・分かりやすい内容で、初心者にも理解しやすかった。
- ・担当している子どもによってニーズは異なる。担任として知っておくべき事は初任の先生への研修で行い、諸検査の結果の読み方や分析の仕方などについては、必要な先生に向けて研修を行うようにすると良い。

d 今後の研修の要望

来年度以降の研修についての要望を、表1に示す。

表1 次回の研修の要望

裸耳聴力測定	3
音場聴力測定	4
補聴器販売店・メーカーによる研修	4
耳の仕組み、聴覚について	4
補聴器調整について	5
語音検査について	5
日常生活での配慮	10
人工内耳について	15
その他	7

その他としてあげられた研修としては、以下のようなものがあった。

- ・事例検討
- ・補聴器メンテナンスについて
- ・生徒に向けた講習会
- ・幼稚部参観
- ・保護者への文献紹介
- ・頭部をぶつけた時の対処
- ・FM補聴システムについて

⑤ 考察

・校内で聴力測定研修を実施したことは、委員会メンバー及び校内教職員の力量向上と、共通理解のために有効だった。

・アンケートより、校内研修は定期的に行うことが必要であることがうかがえた。実習の時間の確保などは今後の課題である。

・研修の要望は多岐にわたった。聴覚の基礎研修・日常の指導で知っておくべき配慮事項・専門研修などに分けて行うことを考えていく必要がある。

(2) その他研修の実施

校内教職員を対象とした聴力測定研修の他に、今年度はメーカーによる補聴機器関連の教職員向け研修を3回行った。また、委員会メンバーは各自で校外の補聴や聴覚活用に関する研修に参加するよう努め、委員会開催時に情報交換も行った。

3 補聴に関するポスターの作成

聴覚活用委員会では、昨年度まで年に6回「補聴だより」を作成してきた。これはA4サイズ1枚で、教室や廊下などに掲示したり、全校に配布したりした。しかしながら、掲示してもあまり目立たず立ち止まって読まなかったり、配布しても興味をもたず読まなかったりする者もいた。そこで今年度は、補聴に関するポスターを作成し、大きなイラストを用いて分かりやすく、目立つようにした。内容は、児童生徒に身近な題材を取り上げ、補聴機器や聴覚障害に対して興味関心が高まるようにした。ポスターはA2サイズで作成し、校内8か所に掲示した。今年度は、10月（図1）、12月（図2）、3月（予定）に発行とした。小学部の児童に対しては内容を厳選し、振り仮名を多くつけることで、より分かりやすく親しみやすいポスターを作成した。また、ポスターをもとにしたクイズを作成し、児童が意識してポスターを見られるようにした。クイズの提出は任意であったが、小学部の委員会メンバーまで提出した児童が何名もおり、自分が知らなかったところに印をつけて持ってきた児童も見られた。なお、「補聴に関するポスター」は、本校ホームページの「リポジトリ」で公開する予定である。来年度も定期的にポスターを発行していきたいと考えている。

(1) 10 月号「補聴器・人工内耳を知ろう」

児童生徒は普段から補聴器を装着しているが、とても身近なものであるのにも関わらず、各部の名称や働きなどを知らない者は少なくない。しかしながら、自分の補聴器と友達の補聴器が異なったり、人工内耳を装着している友達を見たりすると、どこが違うのかと興味をもつ児童生徒は多い。そこで、補聴器と人工内耳の大きなイラストや、様々な補聴器の写真を用いて、各部の名称や働きを分かりやすく紹介した。



図 1 10 月号「補聴器・人工内耳を知ろう」

(2) 12 月号「耳のしくみと役割を知ろう」

聴覚障害について知るために、まず耳の構造や音の伝わり方について取り上げた。耳の構造と音の伝わり方は、大きなイラストを用いて流れが視覚的に把握できるようにした。脳のイラストも挿入し、「音は脳で感じている」ということも強調した。また、耳の働きは音のみを感じると考える児童生徒は少なくないため、内耳を取り上げ、平衡感覚についても記載した。

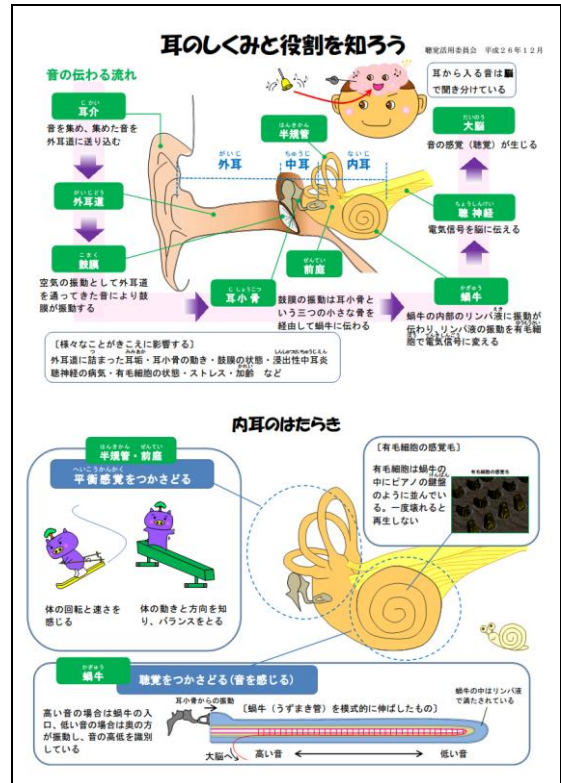


図 2 12 月号「耳のしくみと役割を知ろう」

4 補聴だよりの作成

今年度は新たな取り組みとして、教職員向けの補聴だよりと、児童生徒向けの補聴だよりをそれぞれ分けて作成した。

(1) 教職員向け補聴だより

毎月発行を基本とし、内容については、現在までのところ以下の項目を掲載した。

- 「汗は故障の原因になります」「聴力測定の研修好評でした」「補聴器説明会」「聴力測定予約をどうぞ」「MT 切り替え」「消耗部品あれこれ」「聴力測定のポイント：提示音の大きさ」

(2) 児童生徒向け補聴だより

隔月発行を基本とし、①幼稚部保護者向け、②小学部児童向け、③小学部保護者向け、④中学部と高等部（専攻科含む）生徒向けと対象を分け、計 4 種類を発行した。

また、内容は以下の通り計画した。

- 第 1 回 補聴器や人工内耳の手入れの仕方・管理
- 第 2 回 聴力測定とオーディオグラム
- 第 3 回 補聴器の購入・福祉の制度

今回、補聴だよりの対象を絞ることで、伝えたいことをより明確に表すことができたと考えている。幼稚部から高等部専攻科までである本校においては、それぞれの年齢や補聴のあり方によって、必要な情報は異なってくる。また、ある程度の年齢までは、保護者の協力も欠かせない。補聴機器の管理について、幼児の場合はほぼ全てを保護者が担うことが多いが、小学部は児童自身で行っていく移行段階にある。高等部卒業時に一通りの自己管理ができることを目指して、きめ細かな情報提供を心がけ、補聴だよりの内容や形を考えていきたい。

5 各学部での幼児児童生徒への補聴支援

(1) 幼稚部

幼稚部は、補聴機器の作動状況が疑わしい時には同じ棟にある補聴相談室をすぐに利用できるのが利点である（ただし乳幼児教育相談棟とは別棟）。保護者や担任からの補聴器の点検依頼は日常的にあり、随時受け付けている。

幼稚部では例年通り、学期末に補聴器の一斉点検を行った。それぞれの幼児から補聴器を預かってきて、補聴相談室にて試聴用ロングチューブを使い音をきいて確かめた。必要に応じて補聴器のプログラム内容を確認したり、特性検査をしたり、保護者へ修理の必要性を伝えたりした。

(2) 小学部

小学部では、発音指導の時間に、一人ずつ補聴機器のチェックを行った。補聴器は試聴用ロングチューブで音を聴き、人工内耳については、コイルチェッカーでのチェックや、D.ringの五音を用いた聴こえのチェックを行った。故障が疑われる補聴器は特性検査を行い、必要に応じて保護者や補聴器販売店と連絡をとり、修理を進めた。補聴機器点検をきっかけとして、児童が「補聴器・人工内耳が聴こえない（聴こえにくい）」と、小学部委員会メンバーに持ってくるようになった例が増えた。

また聴力測定・特性検査・補聴器調整を、教育の一環としてとらえ、以下の活動を行った。

- ・聴力測定の結果を児童自身にフィードバックする

ようにし、児童の実態に合わせながら、オーディオグラムの書き込みも児童自身で行うようにした。記号の意味についても、伝えるようにした。繰り返すなかで、測定後、自分の結果を確認しようとする児童が増加した。

- ・児童の実態に合わせながら、補聴器特性検査装置の画面を見せたり、プリントアウトボタンを押させたりした。機種名・製造番号も自分で記載するようにした。

- ・補聴器調整では、今何を行っているかを、児童自身に分かるように説明すると共に、「どのように聴こえるか」、「前と比べて聴こえ方がどのように異なるか」を、児童自身に尋ねるようにした。繰り返す中で、自分の聴こえについて適切に答えられる児童が増加した。

(3) 中学部

中学部では年間を通して、担任が中心となって、保護者と情報交換をしながら補聴機器の手入れや管理を生徒自身が行えるように連携を取ってきている。今年度はさらに、1学期から2学期にかけて、補聴相談室担当と日程を調整しながら、学級単位で自立活動の時間に出前授業を行ったり、聴力測定の際に生徒と対面で補聴機器の点検や確認を行ったりした。

授業では、自分の使っている補聴機器のメーカーや機種名、シリアル番号を調べたり、他の生徒の機器との違いを確認したりすることで意識づけを図った。また、イヤモールドの汚れのふき取りなどを実際に行ったり、汗や湿気への対策や家庭での手入れの仕方などを問いかけたりして、扱い方を確認した。さらに、実際に専用の乾燥器を見せたり、乾燥器を使う際の注意点などの情報提供も行った。

点検にあたっては、一人一人の補聴機器の状態についてイヤモールドやチューブの汚れの有無、各部の異常・故障の有無のチェックを行った。また、自分の補聴機器の設定や普段の手入れの仕方、聞こえの状態等について聞き取りを行った。

出前授業や点検によって生徒の使用状況に関する実態把握が行えただけでなく、生徒自身の補聴機器の管理に対する意識が高まったり、困ったときに補

聴器販売店や補聴相談室に相談に行こうという意識が高まってきている。現状では、自分の使用している補聴機器の設定等について正確に理解できていない場合もあり、今後とも継続して確認や意識づけを行っていくとともに、正確な情報の提供を行っていききたい。

(4) 高等部普通科

高等部普通科の補聴機器点検は、日時を定めて、2学期から数人ずつ補聴相談室で行った。生徒と直にやり取りをしながら点検するようにした。

補聴器装用生徒の場合主に以下の2点を確認した。

- ・本体やイヤモールド、フック、チューブについて、汚れや劣化がないかの確認
- ・試聴用ロングチューブを使った音質の確認

場合によってはチューブを交換したり、補聴器特性試験装置を使用して詳しく調べたりした。その結果、故障が疑われるものについては補聴器販売店へ相談するように勧めた。

人工内耳装用生徒に対しては、耳鼻科での定期的なマッピングを行っているかどうかやプログラムの設定状況を確認するなどした。

生徒の中には、場面に応じてボリューム調節をするなど自己管理をしている者もいた一方で、「MT」機能や自分の補聴器のプログラム内容を知らないなど、必要と思われる情報を把握していないケースもしばしば見られた。自立した社会生活に向けて、自分できちんと補聴の管理ができる知識や態度を育てていく必要性を感じた。

また、今回の補聴機器点検では、「自分にとってのきこえ」について語る生徒もおり、生徒たちがどのようにきこえや補聴機器を捉えているかを知る良い機会ともなった。

個別に直接のやり取りをしながらの補聴機器点検は、故障の発見をすること以外にも意義が大きい。今後も継続していきたい。

(5) 高等部専攻科

高等部専攻科も普通科と同様な形で3学期に補聴機器点検を行う予定である。補聴支援としては、聴

覚障害に関する種々のテーマを扱う授業の一環として、補聴機器全般（各部名称・機能・管理・購入手続き等）やきこえに関する学習を行っている。補聴器の管理に関しては、学習後、方法がわかっても手入れを疎かにして故障させたり不具合を起したりする生徒がいた一方で、補聴器の乾燥機を自ら借りにきたり、不具合についてすぐに相談にくる生徒も見られるようになってきた。

6 幼児児童生徒の良聴耳平均聴力及び人工内耳装用状況（平成 26 年度聴力記録個人票をもとに）

(1) 学部別の状況

以下、各学部における良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者の人数を学部別に図3～7に示した（良聴耳平均聴力の算出に際しては、人工内耳装用者を含めていない）。在籍者数と人工内耳装用者数は表2～6に示した。（平成 27 年 1 月現在）

① 幼稚部

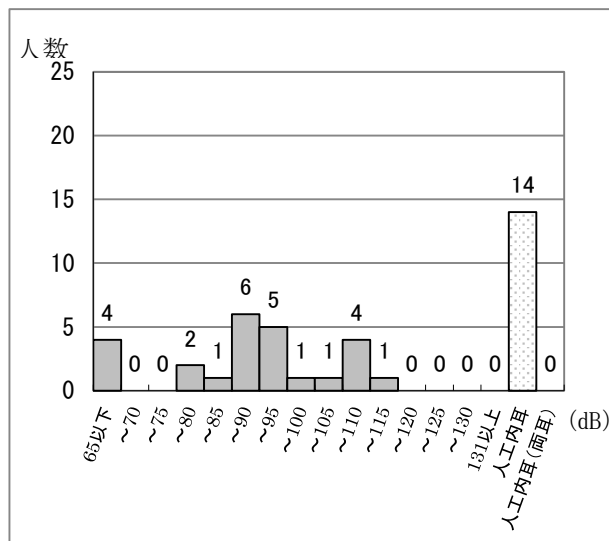


図 3 幼稚部

表 2 幼稚部の状況

	3 歳児	4 歳児	5 歳児	計
在籍者数	13	15	11	39
人工内耳装用者数	5	8	1	14

② 小学部

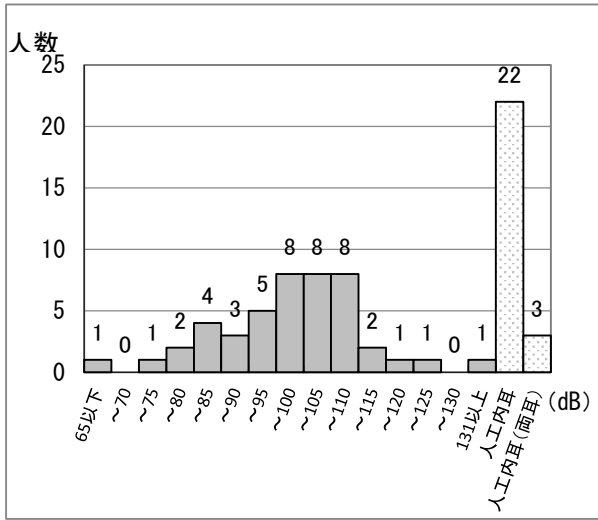


図4 小学部

表3 小学部の状況

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
在籍者数	12	12	9	13	12	12	70
人工内耳 装用者数	8	4	1	4	5	3	25

④ 高等部普通科

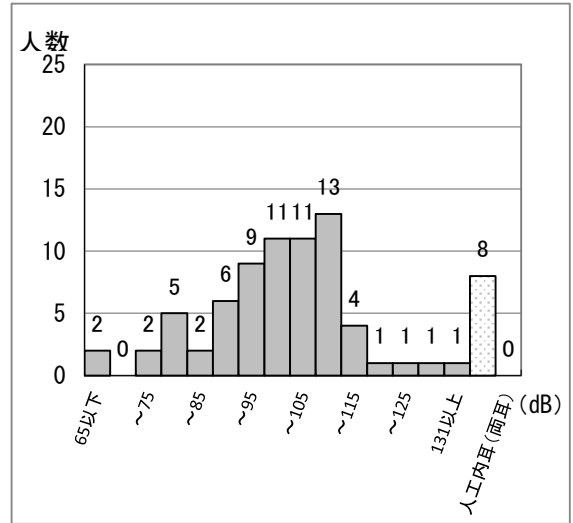


図6 高等部普通科

表5 高等部普通科の状況

	1年生	2年生	3年生	計
在籍者数	26	27	24	77
人工内耳 装用者数	4	4	0	8

③ 中学部

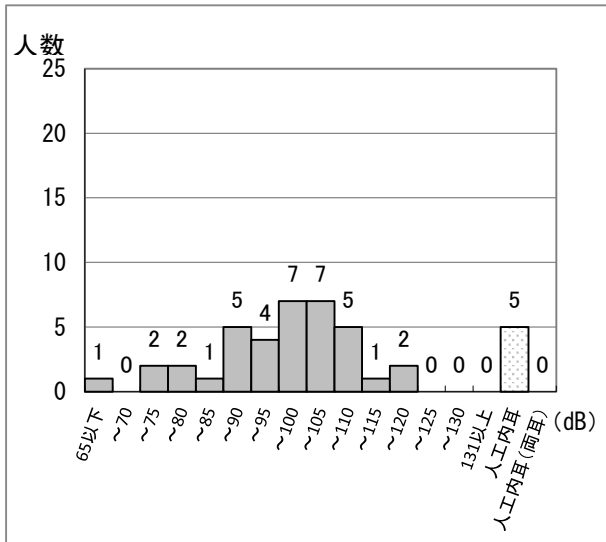


図5 中学部

表4 中学部の状況

	1年生	2年生	3年生	計
在籍者数	14	14	14	42
人工内耳 装用者数	0	2	3	5

⑤ 高等部専攻科

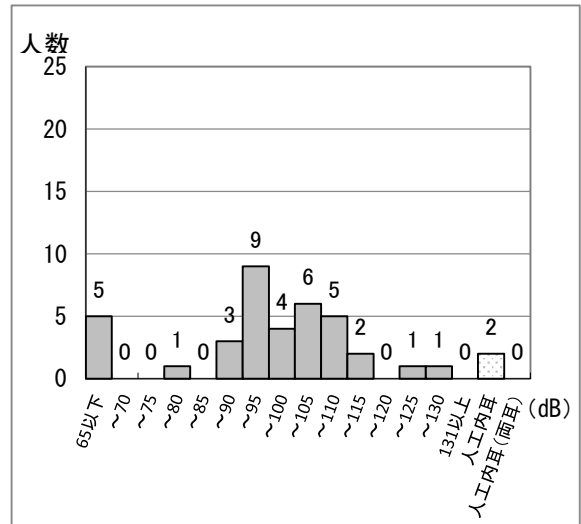


図7 高等部専攻科

表6 高等部専攻科の状況

	造形 芸術科	ビジネス 情報科	歯科 技工科	計
在籍者数	7	10	22	39
人工内耳 装用者数	1	0	1	2

(2) 全校の状況

全校の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者の人数を図 8 に示した（良聴耳平均聴力の算出に際しては、人工内耳装用者を含めていない）。全校の在籍者数と人工内耳装用者数を表 7 に示した。

(平成 27 年 1 月現在)

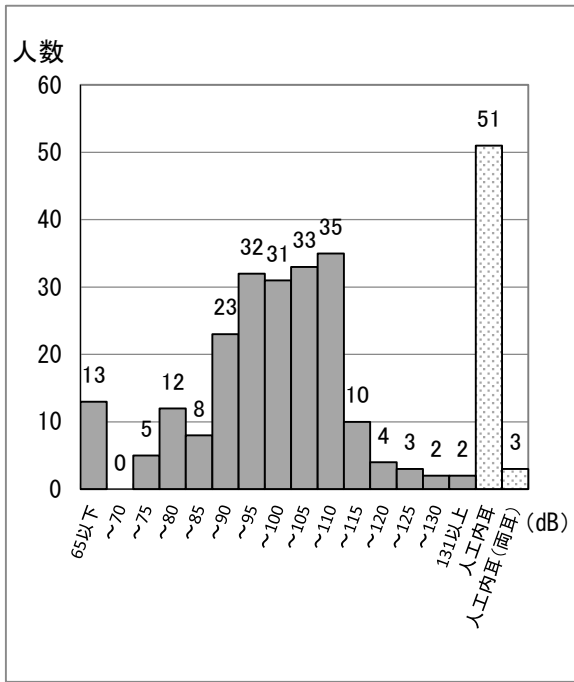


図 8 全校

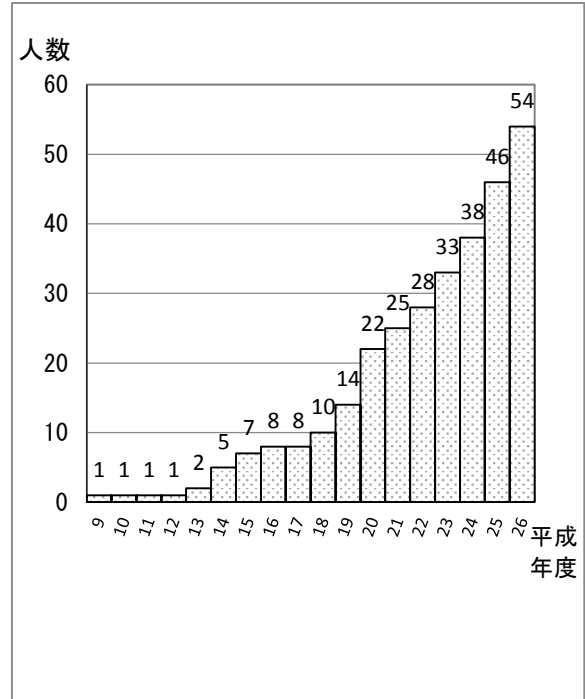


図 9 全校の人工内耳装用者数の推移

表 7 全校の状況

	幼稚部	小学部	中学部	高等部 普通科	高等部 専攻科	計
在籍者数	39	70	42	77	39	267
人工内耳 装用者数	14	25	5	8	2	54

(3) 人工内耳装用者数の推移

本校における、今年度までの人工内耳装用者数の推移を図 9 に示した。